

史料紹介 見性寺所蔵「見性寺記録」

須藤茂樹
岩木太郎
立井佑佳

はじめに

徳島県板野郡藍住町勝瑞の勝瑞城跡（国史跡）に所在する竜音山見性寺は、阿波三好氏の菩提寺として知られる臨済宗妙心寺派の名刹である。徳島県指定文化財の「三好長輝画像」「三好長基画像」などの寺宝を有し、境内には阿波三好氏四代の墓が残されている。

見性寺には、「見性寺文書」と称する古文書群が残されており、簡単な古文書目録は『増補藍住町史』（臨川書店）に掲載されている。江戸時代の見性寺の動向を知る上で貴重な古文書が多数含まれている。江戸時代

本稿では、それらの古文書群の内、「山門不出 記録」「勝瑞邑見性禪寺」とある簿冊を翻刻紹介する。ここでは、「見性寺記録」と呼称する。縦二七・七、横二〇cm。この「見性寺記録」は、徳島藩と見性寺とのやりとりなど江戸時代の見性寺の動向が記されている。

この史料紹介は、四国大学大学院文学研究科日本文学・書道文化専攻の二〇一七年度「特別研究」の授業での成果である。院生の岩木太郎・立井佑佳の二名とともに解説にあたったものである。

見性寺所蔵「見性寺記録」の紹介

(表紙)

山門不出
記録

(一丁表)

申上ル覚 古城跡拝受之願

一板野郡勝瑞村者昔年細川・三好両将古城之地也、當山見性寺依為三好筑前守之長・同元長・同義賢・同長治
 迨代々之菩提所、寺領寄附之折紙三通所持仕候、右四代
 廟塔并肖像只今ニ於致存在候、光勝院・丈六寺当寺三ヶ寺ハ
 古来回格之禪刹ニ而御座候事、
 一蓬庵公御入国之節、三好寄附之寺領被 召上、天正拾四年七月廿七日寺廻ニ而高拾五石之所ハ被下置御折紙所持

(一丁裏)

仕候、其後正保四年御檢地被 仰付、七石八升式合出目有之候処、前長谷川主計殿御申渡二而出目共高合式拾貳石八升式合拝領仕居申事、

一三好古城跡先規當寺境地之内二而御座候、然処寛永之末上り地二被成、當村庄屋萱野二付、願預り居候処、根本之由緒ヲ以、近年當寺へ相讓御運上銀參拾壹兩五分宛毎歲指上來候事、

(二丁表)

一當山佛殿・方丈・庫裡・鐘樓・惣門等年来大破被成、古跡及亡消候、然共元來之貧寺寺領之外少も助縁無御座寺之義ニ候得者、修覆自力ニ難相調迷惑仕候、然共近來御時節柄之御成行奉承知上修覆之願可申上様も無御座候間、先作事ヲ加へ指置申方外無御座候、然所後之修覆之便無御座候条、右古城之跡古來通拝領被仰付候被下候て、樹木植置永々修覆之儀ニ仕度奉存候、奉願通被 仰付候、被下候て、重畳忝可奉存候、御序之刻可然御申上可被可下候、頼存候、以上、

(二丁裏)

見性寺
九月七日
大川
山田織部殿
右之通、享保七年壬寅九月七日石川藤右衛門ヲ以
山田織部殿へ指上、翌年癸卯五月廿八日長谷川伊豆殿御申渡二而願之通仰付也、

覚 御書付之写

見性寺儀板野郡勝瑞村古城跡先規者彼寺境地之内二而有之候、然所寛永之末上り地ニ罷成、同村庄屋

(三丁表)

萱野二願上候而預り居申候、右根元之由緒ヲ以近年右寺へ相讓御運上銀三拾壹兩餘宛毎年指上來候、就中彼寺方丈・庫裡其外所々及大破申候ても元來之貧寺、寺領之外助縁無是修補自力ニ難相調迷惑仕候、右之仕合後々修覆之便無之候条、右之古城跡古來之通被下置候様ニ奉願候、乍去樹木植置永々修覆之便ニ仕候故候間、書付以申上ル趣承届奉願通、右之古城跡御運上銀引き被下候条、此段見性寺へ可被申宜候、以上、

(三丁裏)

一古城跡是方富陽臺と名り
五月廿八日
口上之覚 頭陀行脚之願

當山見性寺年来及大破候二付、後來為修覆當所古城跡拝受之願申上候処、被遂宣名願之通ニ被仰出候、然所當分破損之繕仕度候得共、元來之貧寺指當候繕之役無御座致迷惑候、依之御當國中頭陀行脚ニ罷出

(四丁表)

度候、當寺之儀存不申候者ハ、不審ニも存候而、宿等指支候儀も可有御座候間、無故障致往來候様ニ郡御奉行

中へ御申達被下候て可忝候、只亦行脚之儀長谷川

伊豆殿へ被及御沙汰候儀ニ御座候者、是又然様ニ頼存候、以上、

八月十九日

見性寺

井村茂作様

寺沢茂八郎様 梯与一左衛門殿在江戸、

右之覚書、享保八年癸卯八月十九日ニ山本弥左衛門ヲ以

(四丁裏)

指出候、翌日廿日ニ願之通相濟、同廿三日ニ三郡奉行方

南北与頭庄屋方へ触状之写

板野郡勝瑞村見性寺年来及大破候処、貧寺故修

覆難相調ニ付、此度右住僧御國中頭陀行脚ニ被

罷出候、依之於在々宿等支無之様ニ被可進了簡旨、長谷川

伊豆殿御承知之上、元々中方申来候条、右之旨相心得、

村々宿等支無之様ニ可申付候、以上、

八月廿三日

小嶋文兵衛印

(五丁表)

本庄官左衛門印

○中無印

天羽半兵衛

板野郡与頭庄屋中

餘郡文言右同断

宿手形之願

見性寺弟子超藏主 同嗽藏主 同鑑藏主 同了藏主

右之者共御國中遍歴之内、宿其外諸事手支

無御座候様二面々手前御へ手形五枚申仕度候、郡御奉行

史料紹介 見性寺所藏「見性寺記録」

(五丁裏)

中へ御申達被下候、可忝候、以上、

十一月四日

見性寺

井村茂作様

寺沢茂八郎様

右之覚書夏見清七以指出候、願之通濟、

覚 宿手形之写

僧老入

見性寺弟子

超藏主

右者見性寺為修復郷中頭陀行脚ニ被罷出候ニ付、

(六丁表)

右僧被指出候条、於村々宿船渡等無支可

申付候、以上、

卯十一月七日

山崎久兵衛印

本庄官左衛門印

青山重右衛門印

南北村々

庄屋廿方へ

五通共文言同断

申上ル覚 寺移之願

当山見性寺年来及大破二候へ共、寺領之外聊且縁

(六丁裏)

助力無御座候得者、修補自力ニ難相叶候ニ付者、秋方

御両國中頭陀行脚仕罷在候、因之相應ニ修覆

仕度存奉候、然処近年吉野川筋水先悪敷罷成、

近比段々崩来、只今之躰御座候而者、後々住居之程難

計奉存候条、兼而拝領仕罷在候當村古城跡萱

野へ寺引移度奉存候、奉願通被 仰付被下候者、

重畳忝可奉存候、御序之刻可然様ニ御申上ケ

可被下候、頼存候、以上、

(七丁表)

十月廿三日

見性寺

賀嶋弥右衛門殿

大川

右之紙面、享保九年甲辰十月廿三日石川

藤右衛門ヲ以賀嶋弥右衛門殿へ指上、同十一月七日ニ

願之通被仰出、

覚 御書付之写

見性寺儀、年来寺及大破候へ共、寺領之外聊も且縁

助力無之修補自力ニ難調、去秋方御両国頭陀行

(七丁裏)

脚仕罷在候、因茲相応ニ修覆仕度候、然処近年

吉野川筋水先悪敷罷成近比段々崩来候、唯今之

躰ニ而者後々住居之程難計候条、兼而拝領仕罷在候

古城跡萱野へ寺引移度之旨以紙面申出ル趣

承届、願之通被仰出候、以上、

十一月七日

一享保十一年丙午之春、徳嶋市中勸化之儀町奉行へ

相願濟、手代中方町々年寄共へ被申渡、三十六町へ

(八丁表)

化帳三拾六冊出ス、何茂請取濟、以上、

一享保十一年丙午秋、富陽臺東之堀端ニ御蔵敷

壹町式拾六歩有之処、為門路開之願申達、翌丁

末之春願之通相濟、御檢地被 仰付、以上、

(八丁裏)

(余白)

(九丁表)

持鉢化縁ノ疏

阿州板野郡勝瑞縣龍青山見性禪

寺ハ源ノ朝臣小笠原ノ苗裔三好氏香花ノ

古道場ニシテ四世ノ廟碑今ニ猶ヲ存セリ、其ノ古

迹タルコト天下ニ著シ、本尊ハ聖徳太子彫

刻ノ正觀音ナリ、古来厄払ノ菩薩ト称

スルコト詳カニ縁起ニ載タリ、時カ乎命カ乎、今ヤ山

門荒無シ堂宇頗廢シテ唯柱礎ノ跡

(九丁裏)

ノミ遺レリ、予是レヲ歎息スルコト耳尚シ、維レ

歳癸卯ノ夏 國主大君辱ナク三好

古城迹ヲ賜テ後來修覆ノ助援ト成シム、

今私ニ呼テ富陽臺ト名ヅク、甲辰ノ冬重テ

國命ヲ奉テ山門ヲ靈台ニ移サント欲ス、如

何ガセン腕頭力乏シテ一拳スルニ由ナキコトヲ此ノ

故ニ阿淡國家ノ門戸ヲ叩テ体ヲ捧ケ一偈ヲ

唱テ衆縁ヲ募ル、希幾ハ請善男女各々

(十丁表)

分ニ隨テ淨財ヲ施捨セハ、予ガ志願コト々ニ圓成セン而已、

偈二日ク

同シテ轍ヲ頭陀老飲光ニ
朝々拈メ鉢ヲ下ル禪床ヲ
阿山淡島ノ好風月
盛り得タリ腰間ノ一布囊

(十丁裏)

享保龍集癸卯ノ秋

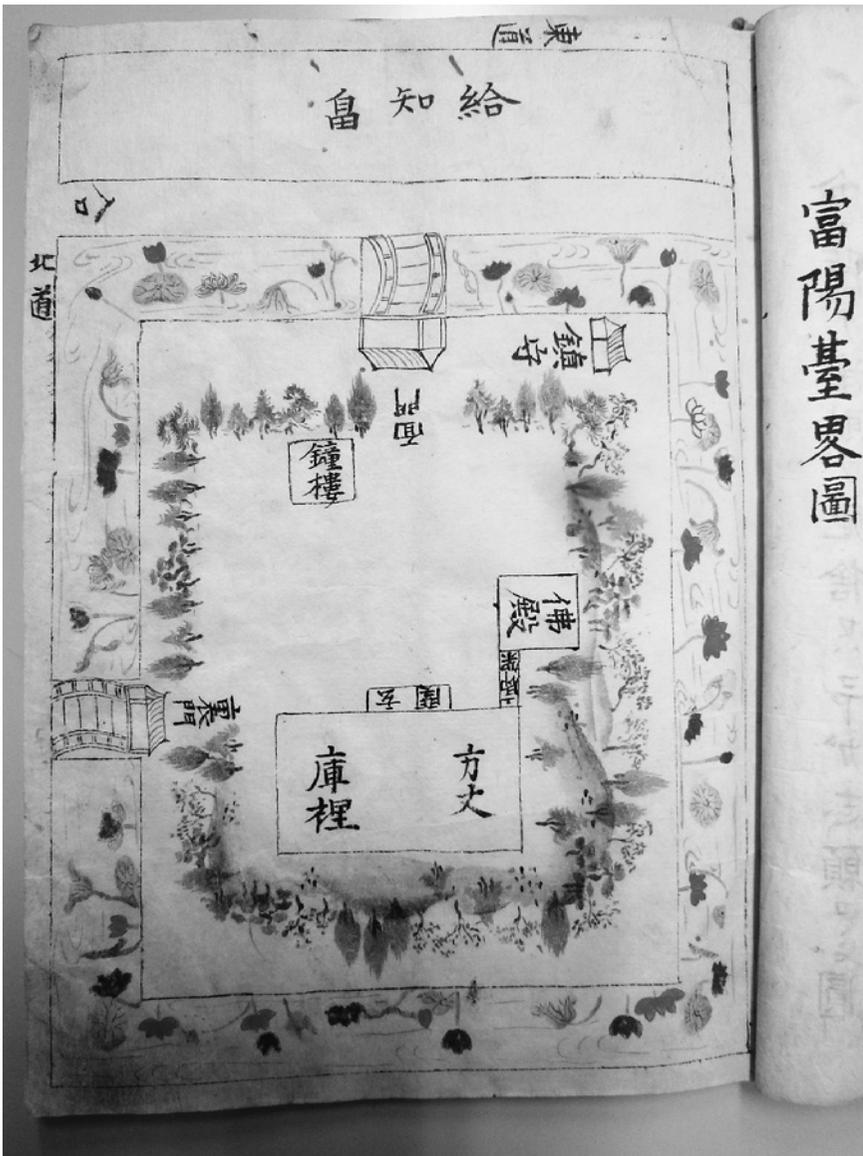
富陽臺小頭陀極大川謹寫

富陽臺畧圖

(十二丁表)

(写真1 富陽臺圖)

富陽臺畧圖



(写真1) 富陽臺畧圖

(十一丁裏・貼り紙)

表 馬木郷二創立也際ニ出来タル棟札ノ写從貞享四年

至当四十一年式百式拾式年經過 (朱書)

茲歲貞享四龍集丁卯仲春ニ冀依干昔日暫更本願如今孝子志知氏支碩新造建大雄寶殿一區資薦父母之冥福伏願天下安全干方來起萬民和樂国土昇平火盜消除大禮那家門鎮靜增福增壽災障不傷吉祥赫集而子孫繁榮現世安穩後世善處專祈山門昌盛法運紹隆內魔外魔都無惱亂現前海衆修行有慶般若智以現前菩提心而不退三有四恩均被普功一切願望皆悉円成者也

貞享四歲丁卯二月二日

現住龍音山見性禪寺小比丘百非孟識

四寸二分 厚サ六分

縦式尺五寸五分 (朱書)

裏 (朱書)

寄語宋無忌火光速入地

元亨利貞

家有壬癸神日賜四海水

四寸一分

式尺一寸五分 (朱書)

貞享丁卯春因暫更 虫喰 (朱書) 堂於境

安置大悲菩薩茲歲享保十七龍集壬子二月廿八冀移寶殿于富

陽臺伏願大檀那家門鎮靜專祈山門昌盛中外咸安火盜潛

消諸緣吉利

享保十七年壬子二月廿八日

現住龍音山見性寺富陽開基大川俊極謹誌

表 馬木ヨリ原今ノ見性寺境内へ移セシ時ノ棟札 (朱書)

寄語宋無忌火光速入地

元亨利貞

家有壬癸神日賜四海水

裏 從享保十七年至明治四十一年百七十七年 (朱書)

從享保十七年至安政元年壹百式拾參年ニシテ倒ル今ヲ去ル五十五年前

(十二丁表)

覚 宿手形調直願之覚書

當山見性寺為修復、去ル卯年以來願以御國中頭陀

行脚仕、三郡御奉行中方宿御手形五通申請候而、無故障

致遍歴候処、當寺無人之上六年相續候故、行脚連滞

仕候、就中去秋方遠方深山へ入籠候而、村々遍歴仕候処、

此節御奉行中名印相変候二付、宿并案内等指支難

儀仕候、右御手形五通之内式通ハ此度御郡所ニ致返納候間、

見性寺同弟子・超藏主・同噉藏主以上三人御手形

(一二丁裏)

三通御調直被下候様ニ御奉行中へ御申達被下候者

可忝候、右之段宣様ニ頼存候、已上、

見性寺

無判

未八月廿一日

齋藤八兵衛様

寺澤四郎右衛門様

梯与一左衛門殿

本庄半藏殿

在江戸

(十三丁表)

右之覚書享保十二丁未八月廿一日半切紙ニ而相調

住持大川御月番八兵衛殿へ持參相濟、

元ノ衆方之状之写

一筆致啓達候、然者貴僧御願候而、近々御国中在之

頭陀行脚被成候、然者先日御覚書ヲ以被仰聞候

趣御當職方へ申送候処、御聞届被成候条、左様御心得

可被成候、然者郡御奉行へ致手配候間、御廻り給り之

(十三丁裏)

村々先々郡附被成御差越可被成候、右之段為可

申達、如是御座候、恐惶謹言、

齊藤八兵衛

八月晦日

寺沢四郎右衛門

見性寺

九月二日二郡村付相調便僧以月番四郎右衛門殿へ遣候、

(十四丁表)

覚 宿手形之写

何郡 何村

右村々庄屋中

僧老入

見性寺弟子

超藏主

右者見性寺寺為修覆郷中頭陀行脚

被罷出候付、右僧被指出候条、於村々宿船渡

等無支可申付候、并山分二而ハ返路不案

(十四丁裏)

内之旨二候条、相尋候者入参相教可申候、

尤外村々ハ相濟候趣故、其村々へ手形如是候、以上、

中山九郎右衛門印

未九月七日 富田茂左衛門 印

伏屋与三右衛門印

何郡何村右村々庄屋中

(十五丁裏)

右之御手形南北格別ニ老僧手前へ式通宛

三人二六通出ツ、六通文言同断、

一申之正月十日二三郡御奉行所へ罷出相頼候ハ、去秋

九月二宿手形御調直シ被下候而、十一月迄致行

脚候所、當寺無人故村数少々巡廻仕候、菟角

遠方山分へハ化帳遣置度候間、御届被成可被下

由申達候所、御奉行中被申候ハ外寺方も右

同断ニ頼来候へ共、何茂内證之勸化故請持不申候、

(十五丁裏)

然共、見性寺儀ハ御當職へ相願之上之勸

化二而候間、化帳請取可被相届旨二付、化帳数

卷相調候而郡所へ頼遣ス、

一享保拾三年戊申春於富陽臺庫裏造立、同

四月十一日移徒、

(十六丁表)

一享保十五年庚戌三月五日二井村茂作殿被出候而、

兼而御存知之通奉及修覆、御両國頭陀行脚

之願ヲ以當御國中致頭陀、大形二行脚担任舞候、

淡路御国之儀者御仕置替ニ而候へハ、近々致渡海候而、

彼御地元ノ衆へ御當地同断ニ覚書ヲ以頭陀之義

相願申度候、就夫御當地元ノ衆方御添状

出候様ニ御申入可被下旨相頼候所、茂作殿早速被

申入、元ノ衆御聞届有之、山田筑後殿へ御窺相濟候

(十六丁裏)

上ニ而、同月十日ニ須本元ノ衆へ帖員之趣茂作殿
被申聞、因茲同十八日ニ御鉢頼紙面原九右衛門

使ニ而指上、

申上ル覚

紙面之写

当寺年来大破ニ罷成候へ共、寺領之外地力無御座、

寺之義彼修補自力ニ難叶御座候ニ付、去卯年

御両國頭陀行脚之願申上候處、被為 聞召

届、願之通被 仰付候所奉存候、其以後當御国

(十七丁表)

中頭陀仕、去々年以来庫裡一宇造立仕

御願被奉存候、猶又近年之内何とそ相應之方丈

造立仕度奉存候、依之此度為頭陀同年須本へ

渡海仕度奉存候、願之通彼地渡海被下置候、

忝可奉存候、以上、

見性寺

戊三月十八日

大川書判

山田筑後殿

(十七丁裏)

即日願之通相濟

同廿六日、発足渡海、即晚江国寺江到着、一宿、

翌廿七日、稲田九郎兵衛殿江罷出、案内諸御用人

衆へ見舞、旅宿上田八郎左衛門殿

同廿九日、元ノ久米六郎兵衛殿・江口弥五右衛門殿へ罷出

當御國中頭陀行脚之願口上ニ而申達、

四月二日、元ノ衆方切紙到来、願之通相濟、

切紙之写

(十八丁表)

以剪紙致啓達候、然者御當国頭陀行脚御

執行有之度旨在之、宿并舩渡シ等支無之様御

願出候付、右之段九郎兵衛殿江申達候處、御聞届

被成執行之節、支無之様ニ郡奉行中江可

申聞旨被仰聞候間、左様御心得可被成候、此段

為可申達如此御座候、以上、

四月二日

久米六郎兵衛

江口弥五右衛門

見性寺

(十八丁裏)

同日、九郎兵衛殿江御禮ニ罷出并元ノ衆へも御禮、

其外諸御用人衆へ吹調、

同三日、町手代高田栄之助・井高理右衛門・町惣

年寄藤屋四郎次郎・正直屋銀太夫・宮本や

祐右衛門江見舞、

同四日、郡手代角村新右衛門・池澤作五右衛門・石濱

徳右衛門へ見舞、

同五日、江国寺方発足、途中滞留、八日二帰着、

(十九丁表)

同九日二山田筑後殿江罷出案内、

辛亥春、洲本市中為頭陀、三月十八日二野口久助

使二而御暇願紙面指上、

申上ル覚

紙面之写

拙僧儀用事御座候二付、洲本へ罷越度奉存候、

御暇被下置候ハ者、忝可奉存候、以上、

見性寺

亥三日十八日

賀嶋伊織殿

大川書判

(十九丁裏)

翌十九日願之通済、廿日御請、

一享保拾七壬子春、佛殿造立、四月廿八日佛祖安座、

観音安座偈

老痴眼暗逞癡鈍 只嘯長空現普門

今日聖容安座了 檻前荷葉無水痕

(二十丁表)

仕上書物之事

一去ル十月九日夜、私藍ぬすまれ申二付、屋搜

仕見申度旨、當所之五人組共方へ申達、何も了簡

之上にて、有増屋搜仕候所、御家頼伊兵衛・助惣

両人之者共方搜申段、追而御申達御吟味可

被遊旨、庄屋善右衛門方へ右之趣御断被遊、然夫

私并五人組庄屋方へ被召寄、段々被仰聞奉驚

行当奉迷惑仕候、私無調法故、何之弁も無御座、

右仕合にて御座候へハ、可申上様無御座候、何れも

御慈悲之上二而、御赦免被遊被下候ハ、難有可奉存旨、

庄屋善右衛門殿并幾左衛門兩人相頼御託申候ハ、下二も

重々御立腹被遊所、何も達而御託言被成、依之

(二十丁裏)

御赦免被遊被下、別而難有奉存候、不申上及候ても

御御家頼二付、向後御外ケ間敷候義、仕出候ハ、如何

様共々可被仰付させ候而、後日御託言書物如件、

元禄十年丑十二月廿五日 勝瑞村内馬木

覚兵衛印

見性寺様

右覚兵衛申上ル通、彼者盗人二逢申義二付、私共不

調法故不了簡仕、然二御頼兩人も所百姓一同之

様二奉存、御窺も不申上、私共心俣二裁判仕、右之

趣御耳達、庄屋方迄御断被遊、段々承知仕

奉驚可申上様無御座、覚兵衛同然二存候も、相頼候

御託言申上所二、先此度御赦免被為遊難有奉存候、

申上ル二不及候ても、此以後御家頼二付、御外ケ間敷

(二十一丁表)

儀其処へ仕間敷候、仍而為後日如件、

丑十一月廿五日

同村五人組 彦兵衛 印

宇兵衛
印
七太夫
印

見性寺様

右之段々承知仕御赦免之旨私二至迄
者奉存候、為後日與書如件、

庄屋

善右衛門印

見性寺様

右本紙有り

(二十一丁裏)

(余白)

(二十二丁表)

龍音山見性禪寺鐘銘并序

南海道阿波州板野郡勝瑞縣龍音山見性禪寺者
舊三好氏香華之道場也、開山翠鷄禪師未詳行
實原丁天正元年土佐長曾我部率兵二萬攻勝瑞
城三好軍敗績、城郭寺院悉羅兵燹亦硝鏃甚傷
哉、爾後統縛一字洞家五岳相繼往來年尚矣我
師頑叟盧中奮当山今某甲住而為妙心末派
一刹一日擅越宗知告予曰我病日衰夙欲鑄銘一

(二十一丁裏)

鐘之願今投捨自金尚募衆緣鑄就巨口資薦冥
福予諾之矣卒扣遠近十餘縣門戸頗得銅鐵助

乃命華浪見氏範圍於囊籬爐鑪雲頃而鐘

即新成嗚呼也、所以滿小子之願終衆徒之志也、仰

冀天人幽明異類萬壽、因茲音聞證入圓通、

銘曰、

勝瑞之乾 松竹鬱翁 鑿開瓦礫

卓立梵宮 有靈妙器 鏗鉤高崇

(二十三丁表)

茲震茲鐘 廣舌鼓龍 驚晚鴉緩

催臂鷄忽 霜布洒落 月磨玲瓏

龍音裂地 獅吼響空 警策昏散

打破旨聲 見性直徹 音聞常融

如來藏海 差別共衆 方便說度

一音長通 彼成與壞 如轉輪風

稱拘留孫 贊寶誌公 川后翼衛

福涌西東 山神降祥 德耀始終

(二十三丁裏)

仰祈 國朝永保無窮

元祿七龍集甲戌佛成道日 現住見性小比丘百非謹撰

治工

為雪林素竹信女鑄就茲小鐘為當山日月之規範伏希

依斯善因證聞思修普導群有同圓種智 銘曰

雖出爐鑪小 功德其大矣 一打鎔聖凡 梵音永不止

元祿七甲戌臘月七日 現住見性小比丘百非誌

治工攝州浪華住久左衛門住之

(二十四丁表)

龍音山見性善禪寺者故三好筑州太守源長輝公累世之香華場也、其寺在馬木者尚矣、享保戊申之春前往大川和尚請于官府移寺與廟於三好氏之城址也、其地卑濕雨潦洊臻宅中水將三尺強而柱根障壁殆圯毀客歲予董此席未嘗不慨然越又距其柱礎進西南可五步築地五尺呂移焉、材取奮工取省不日成矣上棟之次畧記其成云、時寛政九年丁巳四月穀且住慧衰

(二十四丁裏)

志焉

山門鎮靜 火盜潜消 監工 吉田林右衛門
北川氏助

春重構香積一宇拗梁五步桁椽八步

食輪法輪 両俱運轉 大匠 藤原形右衛門

(二十五丁表)

見性寺開創覺書之事

當山ハ小笠原藏人長久其父從四位上代々兵内佐長房之追福之為め建立

御浄山宝珠寺と号す、紀州高野

金剛三昧院より覺心之を創至、翠

桂僧都を開山初祖となす、第七世僧

之隆庵ニ到り、勝瑞城内ニ移シ、見性

寺と改む、永正八年也、為筑前守長元

(二十五丁裏)

追福也、吞海寺才教覺え者之也、翠桂僧都唐之染葉を植ゆ、色衣を

着す、食するニ唐之豆を用ゆ、味噌となす、

人皆之を好む、豆腐となして之を上に献ず、

上意を賜ふ、豆ハいりて戦ひに備うによし

と云ふ云々、

覺心僧都紀州興国寺開山也、神林(信州)和泉守兼久之次子法燈国師之也、翠桂和尚覺心僧都ニ師事、禪を学ぶ、金剛三昧院之徒也、後建仁寺ニ留錫ス、小笠原氏之系ヲ継ぐ、

(裏表紙裏)

阿州勝瑞邑

見性禪寺

おわりに

本稿で紹介した「見性寺記録」は、大破した見性寺の修復に関する記述が中心をなすが、梵鐘の銘文の写や棟札の銘文の写、境内図など貴重な史料を確認できるのは甚だ意義深いものがある。

(須藤茂樹 四国大学文学部日本文学科日本文化史・博物館学研究室)

(岩木太郎 四国大学大学院文学研究科日本文学・書道文化専攻)

(立井佑佳 四国大学大学院文学研究科日本文学・書道文化専攻)

写真1 境内絵図(九五頁 富陽臺絵図)

写真2 札棟

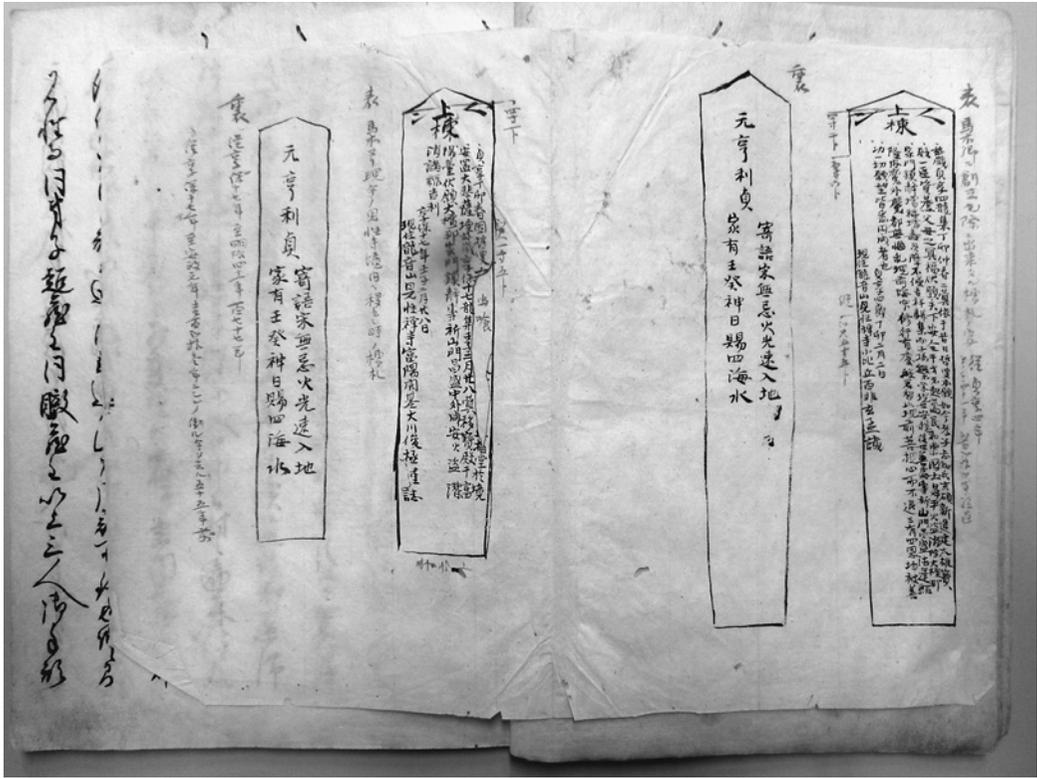


写真3 鐘銘并序(部分)

